パピアス断片・クアドラトゥス断片

パピアス、クアドラトゥス
藤遥　制作

断片一　エイレナイオス『異端反駁』より

1:1 そのときには、造られたものも新しくされ、解き放たれて、天の露と地の肥えたところから、あらゆる食べ物を豊かに実らせる。主の弟子ヨハネを見た長老たちが、思い起こして語っているとおりである。長老たちは、主がその時について次のように教え、語っておられたのを、ヨハネから聞いたという。1:2「ぶどうの木が生える日が来る。その木の一本一本に一万の枝がある。一つの枝には一万の小枝があり、また一つの枝には[1]一万の若枝がある。一つ一つの若枝には一万の房があり、一つ一つの房には一万の粒がある。その一粒一粒を搾ると、千リットルほどのぶどう酒ができる。1:3 聖徒のひとりがその房の一つをつかむと、別の房が叫ぶ。『わたしのほうが良い房です。わたしを取ってください。わたしによって主をほめたたえてください』。同じように、一粒の麦も一万の穂を生じ、一つ一つの穂には一万の粒がある。その一粒一粒から、白く清い上等の小麦粉が三キログラムほど取れる。ほかの果物も種も草も、これに見合う割合で増える。地から取れるこれらの食べ物を食べる動物はみな、互いに穏やかに仲よく暮らし、ことごとく人に従うようになる」1:4 パピアスもまた、これらのことを書き記して証言している。彼はヨハネに聞いた者で、ポリュカルポスの仲間であり、昔の人である。証言は、彼の書物の第四巻にある。彼の著した書物は五巻あるのである。そして彼は、次のように付け加えている。1:5「これらのことは、信じる者には信じられることである」。また、彼は言う。「裏切り者のユダは信じないで、『では、このように生み出されるものを、主はどのようにして成し遂げられるのですか』と尋ねた。すると主は、『その時に至る者たちが、それを見る』と言われた」

訳注

1　『一つの小枝には』の誤りとみられ、そう読む古い訳もある。

断片三（1〜7節）エウセビオス『教会史』三・三九より

2:1 パピアスの著作としては五巻が伝わっている。その五巻には『主の言葉の解き明かし』という題が付いている。エイレナイオスも、パピアスが書いたものとしてこれだけを挙げ、おおよそ次のように言っている。「パピアスもまた、これらのことを」云々（断片Ⅰ4節）。2:2 エイレナイオスの言うところは以上である。しかしパピアス自身は、書物の序文で、自分が聖なる使徒たちに聞いた者でも、彼らを見た者でも決してないことを示している。むしろ、信仰のことは使徒たちと親しかった人々から受け継いだと教えている。その言葉は次のとおりである。2:3「私は、かつて長老たちからよく学び、よく覚えたことも、ためらわずに、あなたのために私の解き明かしに書き添えよう。それが真実であることを、私は請け合う。私は、多くの人々のように、多くを語る者たちを喜んだのではなく、真実を教える者たちを喜んだからである。また、よその戒めを語り伝える者たちを喜んだのでもない。主から信仰に与えられ、真理そのものから出た戒めを語り伝える者たちを喜んだのである[1]。2:4 また、長老たちに付き従っていた人がどこかから来ると、そのたびに私は、長老たちの言葉を尋ねた。アンデレやペテロが何と言ったか。ピリポやトマスやヤコブが、ヨハネやマタイが、あるいは主の弟子のうちのほかのだれかが、何と言ったか。また、ともに主の弟子であるアリスティオンと長老ヨハネが、何と言っているか。書物から得られるものが、生きて、とどまり続ける声から得られるものほど私の益になるとは、思わなかったからである」2:5 ここで心に留めておくべきことがある。パピアスはヨハネの名を二度数えている。そのうち初めのヨハネを、ペテロ、ヤコブ、マタイ、そのほかの使徒たちと並べて挙げている。これは明らかに福音書記者を指している。もう一人のヨハネは、言葉を区切ってから、使徒たちの数に入らないほかの人々の中に置いている。しかもその前にアリスティオンを挙げている。2:6 そして、このヨハネをはっきりと「長老」と呼んでいる。そのため、これによっても、ある人々の話が本当であることが示される。アジヤに同じ名を持つ人が二人いて、エペソには二つの墓があり、どちらも今なおヨハネの墓と言われている、という話である。このことにも注意を向けなければならない。ヨハネの名で伝わっている黙示録を見たのは、二人目のヨハネだと考えるのが自然だからである。もっとも、一人目だと考えたい人がいるなら別である。2:7 また、今ここで取り上げているパピアスは、使徒たちの言葉については、彼らに付き従った人々から受け継いだと認めている。しかし、アリスティオンと長老ヨハネについては、自分で直接聞いたと言っている。実際、パピアスはしばしば二人の名を挙げて触れ、自分の著作に二人の言い伝えも書き記している。以上のことも、むだに述べたのではないとしておこう。

訳注

1 多くの写本では、真理から来たのは戒めでなく、それを伝える人々である。

断片二（8〜16節）　エウセビオス『教会史』三・三九より

2:8 先に引いたパピアスの言葉に、彼のほかの言葉も書き添えておくべきである。その中でパピアスは、言い伝えによって自分に届いたものとして、いくつかの不思議なことや、ほかのことを伝えている。2:9 さて、使徒ピリポが娘たちとともにヒエラポリスで暮らしたことは、先に述べた。パピアスはその人々と同じ時代の人で、ピリポの娘たちから驚くべき話を受け継いだと触れている。このことを、ここで書き留めておかなければならない。彼の伝えるところでは、彼の時代に死者がよみがえったのである。また、バルサバと呼ばれたユストについても、別の不思議なことが起こったと伝えている。ユストは毒を飲んだが、主の恵みによって、少しも害を受けなかったというのである。2:10 このユストは、救い主が天に上げられたのち、聖なる使徒たちが、マッテヤと並べて立て、祈った人である。裏切り者のユダに代わって、自分たちの数を満たすくじにかけるためであった。使徒行伝は、おおよそ次のように記している。『そこで一同は、バルサバと呼ばれ、またの名をユストというヨセフと、マッテヤとのふたりを立て、祈って言った』（使徒一・二三〜二四）。2:11 また同じパピアスは、書かれていない言い伝えによって自分に届いたものとして、ほかのことも載せている。救い主の聞き慣れないたとえや教え、また、ほかにもいくらか作り話めいたことである。2:12 その中で彼は、死者の中からの復活ののちに千年ほどの時がある、とも言っている。そのとき、キリストの国がまさにこの地上に、からだを備えた形で打ち立てられるという。私の考えでは、彼は使徒たちの話を取り違えて、こう考えたのである。使徒たちが象徴を用いて、隠れた意味で語ったことを、見て取れなかったのであろう。2:13 彼の言葉から判断して言うなら、パピアスは明らかに、ひどく理解の乏しい人だったからである。それでも彼は、後に続く教会の人々のうち実に多くの者にとって、彼と同じ考えを持つもとになった。その人々は、この人の古さを盾に取ったのである。エイレナイオスがそうであり、ほかに同じ考えを示した人がいれば、その人もそうである。2:14 また彼は、ほかの話も自分の書物に伝えている。先に名を挙げたアリスティオンが主の言葉について語った話と、長老ヨハネの言い伝えである。学ぶことを好む人々には、それらを見てもらうことにしよう。ここでは、先に引いた彼の言葉に、どうしても一つの言い伝えを加えなければならない。福音書を書いたマルコについて、次のように記されている言い伝えである。2:15 「長老はこうも言っていた。『マルコはペテロの通訳となり、覚えていたかぎりのことを正確に書いた。キリストが語られ、また行われたことである。ただし、順序どおりにではなかった。マルコは主に聞いたこともなく、主に付き従ったこともなかったからである。しかし、のちに、前にも言ったように、ペテロに付き従った。ペテロは、そのときどきの必要に応じて教えを語ったが、主の言葉を、いわば順序立ててまとめようとしたのではなかった。だから、マルコが、思い出したとおりにいくつかのことを書いたのは、少しも誤りではなかった。彼は一つのことにだけ心を配ったからである。聞いたことを何一つ落とさず、その中に何も偽りを入れないことである』」。以上が、パピアスがマルコについて伝えていることである。2:16 マタイについては、次のように言われている。「マタイはヘブル語で言葉を書き記した。それを、人々はおのおのできるかぎり訳した」。また、パピアスは、ヨハネの第一の手紙からの証言を用い、同じくペテロの手紙からの証言も用いている。さらに、多くの罪のために主の前で訴えられた女の、別の話も載せている。『ヘブル人による福音書』に収められている話である。以上のことも、先に述べたことに加えて、どうしても書き留めておくことにしよう。

断片三〜六　アポリナリオス、アンドレアス、アナスタシオス、マクシモスより

3:1 アポリナリオスの言葉。ユダは首をつって死んだのではない。息が絶える前に下ろされて、生き延びたのである。使徒行伝も、このことを示している。そこには『まっさかさまに落ちて、腹がまん中から引き裂け、はらわたが流れ出た』とある（使徒一・一八）。ヨハネの弟子パピアスは、このことをもっとはっきり伝えている。『主の言葉の解き明かし』の第四巻で、次のように言うのである。3:2「ユダは、この世で不敬虔の大きな見せしめとなって歩き回った。その肉はひどく膨れ上がり、彼は、車がたやすく通るところさえ、通れなくなった。いや、頭の大きさだけでも、通れなかったのである。人々の話では、まぶたがひどく腫れたのである。そのため、彼自身は光がまったく見えず、医者が器具でのぞいても、その目は見えなかったという。それほど深く、目は外の表面から沈んでいたのである。陰部は、どんな醜いものよりもいとわしく、大きく見えたという。からだじゅうから膿と蛆が流れ集まり、そこを通って出て来た。ただ用を足すだけで、そうして恥をさらしたという。3:3 人々の話では、彼は多くの苦しみと罰を受けたのち、自分の地所で死んだ。その悪臭のために、地所は今に至るまで荒れ果て、住む人がいなくなったという。いや、今日でも、手で鼻をふさがなければ、だれもそこを通り過ぎることができないという。彼の肉から流れ出たものは、それほど多く、地にまで及んだのである」。

4:1 パピアスは、言葉どおりに次のように言う。「彼らのうちのある者たち、すなわち、かつては神のものであった御使たちに、地の秩序を治めることもゆだねた。そして、よく治めるように命じた」。そして続けて言う。「ところが、彼らの位は、無に帰することになった」。

5:1 もっとも、この書（ヨハネの黙示録のこと）が神の霊感によることについては、長々と論じるのは無用であると、私たちは考える。幸いな人々、すなわち神学者グレゴリオスとキュリロスが、この書の信頼に足ることを証言しているからである。さらに、もっと古い人々、パピアス、エイレナイオス、メトディオス、ヒッポリュトスも証言している。

6:1 あの名高いパピアスから、手がかりを得た。ヒエラポリスの人で、主の胸に寄りかかった弟子に学んだ人である。また、クレメンスと、アレクサンドリア人の祭司パンタイノスと、いとも賢いアンモニオスからも得た。公会議より前の[1]、古い解き明かす者たちである。この人々は、六日間の創造の全体を、キリストと教会にかかわるものと解した。

7:1 さて、教会の解き明かす者たちのうち、より古い人々がいる。哲学者で、使徒たちと同じ時代の人であったフィロンと、偉大なパピアスである。パピアスは、福音書記者ヨハネに学んだ人で、ヒエラポリスの人であった。（中略）この人々とその周りの人々は、楽園のことを霊的に解し、キリストの教会にあてはめたのである。

8:1 神に従って無垢を修める人々を、「子供たち」と呼んでいた。パピアスも『主の言葉の解き明かし』の第一巻で、そのことを示している。アレクサンドリアのクレメンスも『教育者』で示している。

9:1 思うに、彼はこう言うことで、パピアスをほのめかしているのである。パピアスは当時アジヤのヒエラポリスの監督で、神聖な福音書記者ヨハネと同じ時代に盛りを迎えた人である。このパピアスは『主の言葉の解き明かし』の第四巻で、復活のときに食べ物による楽しみがあると言ったからである。（中略）リヨンのエイレナイオスも、『異端反駁』の第五巻で同じことを言っている。そして、自分の言ったことの証人として、いま述べたパピアスを持ち出している。

訳注

1 古い版では『互いに一致した最初の』となる。

断片Ⅹ〜ⅩⅣ　フォティオス、教会史の要約の抜粋、ゲオルギオスの年代記、エウセビオスより

10:1 （中略）いや、それどころか、（ステファノスは）ヒエラポリスの監督で殉教者であるパピアスも、リヨンの聖なる監督エイレナイオスも、受け入れない。二人が、天国とは、感覚でとらえる何かの食べ物を楽しむことだ、と言う点においてである。

11:1 ヒエラポリスの監督パピアスは、神学者ヨハネに聞いた者であり、ポリュカルポスの仲間であった。彼は、『主の言葉』を五巻書いた。その中で、彼は使徒たちを数え上げた。そして、ペテロとヨハネ、ピリポとトマスとマタイの後に、アリスティオンと、もう一人のヨハネを、主の弟子のうちに記した。このヨハネを、長老とも呼んだ。そのため、ある人々は、ヨハネの名で伝わっている二つの短い公同の手紙は、このヨハネのものだと考えている。昔の人々は、第一の手紙だけを認めていたからである。また、ある人々は思い違いをして、黙示録もこのヨハネのものだと考えた。パピアスもまた、千年王国について誤っている。

11:2 パピアスは第二巻で、神学者ヨハネとその兄弟ヤコブ[1]が、ユダヤ人に殺されたと言っている。先に述べたパピアスは、ピリポの娘たちから受け継いだ話として、次のことを伝えた。ユストとも呼ばれるバルサバが、信じない者たちに試され、まむしの毒を飲んだ。それでも、キリストの名によって、何の害も受けずに守られたのである。パピアスは、ほかの驚くべきことも伝えている。とりわけ、マナイモスの母が死者の中からよみがえった話である。キリストによって死者の中からよみがえった人々についても伝えている。彼らは、ハドリアヌスの時代まで生きていたという。

12:1 ドミティアヌスの後、ネルワが一年のあいだ皇帝として治めた。ネルワはヨハネを島から呼び戻し、解き放って、エペソに住まわせた。ヨハネは、そのとき十二弟子のうちで、ただひとり生き残っていた。そして、ヨハネによる福音書を書き記したのち、殉教の栄誉を受けた[2]。

12:2 ヒエラポリスの監督パピアスは、ヨハネを見た者である。そのパピアスが、『主の言葉』の第二巻で、ヨハネがユダヤ人に殺されたと言っているからである。すなわち、ヨハネは兄弟とともに、自分たちについてのキリストの予告を成就させた。また、このことで自分たちが言い表し、承知したことも、果たしたのである。主は彼らに、『わたしが飲む杯を飲むことができるか』と言われた（マルコ一〇・三八）。彼らは進んでうなずき、承知した。すると主は、『あなたがたは、わたしの杯を飲み、わたしが受けるバプテスマを受ける』と言われたのである（マルコ一〇・三九、マタイ二〇・二三）。それも当然である。神が偽ることは、ありえないからである。

12:3 博学なオリゲネスも、マタイによる福音書の解き明かしで、同じように断言している。ヨハネは殉教した、というのである。そして、このことを使徒たちの後継者たちから学んだと、ほのめかしている。そればかりか、博識なエウセビオスも、『教会史』（三・一）でこう言っている。「トマスはパルテヤを、ヨハネはアジヤを割り当てられた。ヨハネは、アジヤの人々のもとにとどまり、エペソで生涯を終えた」。

13:1 さらに、そのころ、アジヤでは、使徒たちと親しく交わったポリュカルポスが、際立っていた。彼は、主を見、主に仕えた人々から、スミルナの教会の監督の職をゆだねられていた。ポリュカルポスと同じ時代に、パピアスが名を知られていた。彼もまた、ヒエラポリスの教区の監督であった。

14:1 エイレナイオスとほかの人々は、使徒ヨハネがトラヤヌスの時代まで生き長らえたと伝えている。その後、ヒエラポリスのパピアスと、スミルナの監督ポリュカルポスが、ヨハネに聞いた者として知られるようになった。

訳注

1 『神学者』と『その兄弟』は後の人の書き加えとみる説がある。
2 ほかの写本では『安らかに眠った』とあり、続く殉教の話はない。

断片XV〜XX　ヒエロニュムス、ヨハネによる福音書の序文、カテナ、ヴァルダンより

15:1 ヨハネに聞いた者パピアスは、アジヤのヒエラポリスの監督であった。彼は五巻だけを書き、それに『主の言葉の解き明かし』という題を付けた。その序文で彼は、さまざまな意見に従うのではなく、使徒たちを拠りどころとしている、と言い切る。そして、こう言っている。「私は、アンデレが何と言ったか、ペテロが何と言ったかを考えた。ピリポが、トマスが、ヤコブが、ヨハネが、マタイが、あるいは主の弟子のうちのほかのだれかが、何と言ったかを考えた。また、ともに主の弟子であるアリスティオンと長老ヨハネが、何と語っていたかも考えた。書物を読んでも、生きた声ほどには私の益にならないからである。その声は、それを語った人々の中で、今日に至るまで響いている」。15:2 このことから、すなわち名の並びそのものから、次のことが明らかである。使徒たちのうちに置かれているヨハネと、アリスティオンの後に数えられている長老ヨハネとは、別の人なのである。私がこのことを述べたのは、先に挙げた意見のためである。多くの人々がそう伝えていると、私が述べた意見である。ヨハネの後の二つの手紙は、使徒のものではなく、長老のものだ、というのである。15:3 この人は、千年についてのユダヤ的な言い伝えを世に出したと言われる。エイレナイオスとアポリナリオスと、ほかの人々が、彼に従った。この人々は、復活の後、主が肉体をもって、聖徒たちとともに治めると言う。テルトゥリアヌスも『信者の望みについて』という書物で、この考えに導かれている。ポエトウィオのウィクトリヌスとラクタンティウスも、そうである。

16:1 さらに、ヨセフスの書物や、聖なるパピアスとポリュカルポスの書物を、私が訳したという噂が、あなたのもとに届いた。だが、それは偽りの噂である。これほどのものを、同じ美しさのまま別の言葉に移すことは、私の暇にも力にも余るからである。

17:1 エイレナイオスは（中略）福音書記者ヨハネに聞いた者パピアスの弟子であり（中略）伝えている。

18:1 ヨハネによる福音書の序文が、ここから始まる。ヨハネによる福音書は、ヨハネがまだ体のうちにあったときに、ヨハネ自身によって明らかにされ、諸教会に与えられた。ヒエラポリスのパピアスという名の、ヨハネに愛された弟子が、外向けの、すなわち最後の五巻[1]で、そう伝えているとおりである。18:2 ［そして、ヨハネが口で述べるとおりに、福音書を正しく書き取った[2]。しかし、異端者マルキオンは、反対のことを考えていたので、彼にとがめられ、ヨハネに退けられた。このマルキオンは、ポントスにいた兄弟たちからの書き物、あるいは手紙を、彼のもとに届けていたのである］。

19:1 これらの人々のうち、最後に来るのは、雷の子と呼ばれたヨハネである。彼はたいそう年老いていた。エイレナイオスとエウセビオス、そのほか、代々続いた信頼できる歴史家たちが、私たちに伝えているとおりである。そのころ、恐ろしい異端がいくつも芽生えていた。ヨハネは、自分の弟子で、行いの正しいヒエラポリスのパピアスに、福音書を口で述べて書き取らせたのである。自分より前に、全世界の民にみことばを宣べ伝えた人々の、欠けを補うためであった。

20:1 戸が閉じられていたときに、十一人（の弟子）と、彼らと一緒にいたほかの人々に、姿を現された。彼らが持ってきた沈香は、油と蜜を半分ずつ混ぜたものであったという。しかし、沈香が乳香の一種であることは確かである。地理学者とパピアスが伝えるとおりである[3]。それによれば、インドには十五種類の沈香があり、そのうち四種類が高価なものである。ニクレ、アンドラタラツ、イェラウォル、ザコトケンである。ヨセフとニコデモが葬りのために出したのは、そこから来たものであった。二人は金持ちだったからである。

訳注

1 本来は『解き明かしの五巻』とあったのが、写し誤られたとみられる。

2 ［］の部分は、パピアスの伝えではなく、別の資料によるとみられる。

3　パピアスに由来するのは、沈香が乳香の一種だという言葉だけとされる。

クアドラトゥスの断片　エウセビオス『教会史』四・三より

Q:11 トラヤヌスが満二十年に六か月足りない年月のあいだ帝位を保ったのち、アエリウス・ハドリアヌスが統治を継いだ。クアドラトゥスは、この皇帝にあてて論を書き、差し出した。神をうやまう私たちの道のために、弁明をまとめたのである。ある悪い者たちが、私たちの側の人々を悩ませようとしていたからである。その書は、今も兄弟たちの多くのもとに伝わっており、私たちの手もとにもある。そこから、この人の知性と、使徒にかなう正しい教えとを示す、はっきりした証拠を見て取ることができる。Q:12 この同じ人は、次のことを自分の言葉で伝えており、それによって、自分が古い時代の人であることを示している。「私たちの救い主のみわざは、いつもそこにあった。それはまことのものだったからである。そのみわざとは、いやされた人々と、死者の中からよみがえった人々である。彼らは、いやされ、よみがえるところを見られただけではない。いつもそこにいるところも見られたのである。救い主がこの世におられたあいだだけではない。救い主が去られた後も、かなり長いあいだ、彼らはそこにいた。そのため、彼らのうちのある者は、私たちの時代にまで至ったのである」。

パピアス断片・クアドラトゥス断片

2026年11月23日版
著者　パピアス、クアドラトゥス
制作　藤遥
発行　christian-classics-jp
公開　https://christian-classics-jp.github.io/site/papias-quadratus/
原稿　https://github.com/christian-classics-jp/site/tree/master/books/papias-quadratus
全文を、ギリシア語とラテン語の原文からAIを使って翻訳しました。
訳文はCC0 1.0で公開しています。引用した聖書の本文は含みません。